岡豊風日

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第37号 2000年10月1日

生活語文化としての民具

高知女子大学文化学部助教授　橋尾　直和

ここ数年、中山間における地域文化研究の一環として、民具の調査に携わっている。十数年前まで焼畑農業が残っていた池川町椿山（つばやま）、同じく焼畑農業を営んでいた本川村寺川や大豊町奥大田、物部村岡ノ内など、過疎化が進む集落の調査を行っている。私の現在の研究テーマは、目に見えない文化としての方言を、目に見える文化として具現化してくれる「もの」としての民具の調査を基に、地域の生活語文化を体系化することにある。

参考のため、県内の民具資料館・郷土資料館を数件廻って気づいたことがある。それは、一般名称（共通語）と個別名称（方言）を混同している展示品の多いことである。また、全体名称、部分名称の区別があいまいな記述をしている説明もいくつか見受けられた。そこで私は、特に方言呼称による民具の記録・保存の重要性をここに示したいと思う。

たとえば、「大鋸」あるいは「木挽鋸」と表示されたもの。これは土佐方言で広く「オンガ」と言う。また、方言名称を「カンチョロ（カンテラ）」と表示されたもの。これは、地域によっては全体名称を「ンガンドー」と言い、カンチョロは火を点す芯の部分名称を指すものであったりする（物部村岡ノ内）。大切なのは、先人達が「生活語」としての方言で名付けた名称を正確に記録・保存しておくことである。名称の付けられ方も文化の所産である、という視点が必要なのではないだろうか。

民具は言うまでもなく、地域の人々の生活・歴史が道具の中に集約された「もの」である。言い換えれば、歴史・系統・伝播・製作技術・用いる人々の心性などを暗示している。それだけに、「生活語文化」としての民具の記録・保存方法が確立されるべきである。

ＮＨＫで「二十一世紀に残したいふるさと高知のことば」を募集したところ、一千通を越えるハガキが送られてきた。このことは、地元高知のことばを次世代に受け継いでいきたいという人々の願いが多いことを表している。民具も歴史・文化を語る貴重な資料として、方言とともに次世代に語り継いでいくべきものであろう。

民具資料館・郷土資料館における民具の展示のあり方と同時に、民具の価値を次世代へ伝える伝え方について、「土佐ことばカンカンミンガク」の発想を提唱したいと思う。

カンカンミンガクとは「館・官・民・学」のことである。「館」は博物館・民俗資料館などのミュージアム、「官」は行政、「民」は県民、地域住民、「学」は小学校・中学校・高等学校それに大学を加えた教育機関のことである。これらが一体化して地域文化の継承に取り組めば、文化発展のために大きな力となるはずである。

民具資料館・郷土資料館の展示のあり方は、民具をそのまま陳列するのみではなく、県民が共有する文化遺産として、分かち合う姿勢が大事なのではないだろうか。そのためには、展示してそれで終わりというのではなく、民具が「生活語文化」であるとの認識を持って、地域住民と語り合う場が必要となる。

その場として、歴史民俗資料館と教育機関が共同で生活語文化としての民具の方言呼称を記録したり、地域住民が積極的に民具の調査・学習会に参加することなどが考えられる。このためには、行政の援助も必要になる。理想を現実に近づけるために皆さん「カンカンミンガク」してみませんか!!

物部村岡ノ内における民具調査（2000.8.5）

二〇〇一年への伝承

―企画展「おばあちゃんの見た山村の八〇年」をめぐって―

梅野　光興

◆企画展のできるまで

九年前、この『岡豊風日』の第一号に「一九九一年の伝承」というエッセーを書いた。山間の村で明治四十三年生まれの老人から大蛇の伝説を聞いたという内容である。お伽話にも似た伝承だが、老人の語り口は真剣で、私は実際に人に会って伝承を聞くことの重要性を感じたことであった。老人の名前をそのときは書かなかったが、その人が実は、今回の企画展「おばあちゃんの見た山村の80年」の家の主人・宗石直喜さんであった。

私は、その後も機会あれば宗石家を訪れた。腰が直角に曲がり二本の杖を支えに外を歩いていた直喜さんは、やがて板戸の向こうに休んでいることが多くなり、二年ほど前に病院に入院されてしまった。

代わって私たちの相手をして下さったのが、奥さんの春子さんである。春子さんは気さくな方で、突然訪れる私たちをいつも大歓迎で迎えてくれるのだった。

私たちが度々宗石家を訪れるのは、歴民館に、寄贈して頂いた百点あまりの民具を収蔵しているので、その資料の名前や使い方を聞くためであった。昭和五十五年の収集に際し、骨を折ったのが、現在当館の館長坂本正夫であるのも、不思議な縁である。

しかしながら、正直なところ、ほかの仕事に追われての宗石家資料調査は遅々として進まなかった。企画展や普及事業などの予定の決まった事業を実行するのがどうしても優先され、収蔵資料の整理調査といった大事な仕事が後回しになってしまう。

そんなとき朝倉千代さんと出会った。彼女は山村の生活に関心が強く、大学時代に民俗調査に携わった経験もある。大津民具館の調査に参加してもらい（この成果は企画展図録『昔のくらしと道具』に集約してある）、ひき続き資料調査員として岡ノ内の調査を担当してもらった。

本格的な調査が始まったのは、昨年四月。朝倉さんは、多いときは毎週のように、少ないときでも月に一度は岡ノ内を訪ね、春子さんや長女の中川幸子さんに、いろんな山の暮らしの話を聞いてきた。あるときは一緒にお茶をつんだり、七夕飾りをしたこともあったそうだ。私も時間が許せば同道させてもらった。

こうして、まだ完全ではないが、岡ノ内の生活の一端が浮かび上がってきたのである。

◆ユニークな視点の企画展

今回の展示は、いわゆる民具展だが、一軒の家の民具が中心で（実際には、無い資料については物部村歴史民俗資料室などの応援を得た）、聞き取り調査の相手をひとりの女性に絞ったという点で大変ユニークなものである。

ふつうはあるムラの民俗を調べる場合、ひとつの事柄でも複数の人に聞いて伝承が正しいかどうかを確かめながら、そのムラの一般的な民俗をまとめていく。この方法だと、そのムラの民俗の概要は大変わかりやすいが、反面、そのムラに生きている個人個人の顔が見えにくくなる。

また民具研究の側からは、一軒の家の収蔵民具の全体像を調べるという研究はかってからあり、影響を受けた。

今回の展示は、宗石春子さんという個人に焦点を絞ることで、より具体的な個人の記憶や思いに結びついた民具展示を目指したいと考えている。

だが、個人を扱うからといって、春子さんが特別な人であるというわけではない。宗石家を取り上げるのは、たまたま二十年前に県の方へまとまった資料を寄贈して頂いたというだけが理由であり、この家が歴史上の事件に関わっているとか、よそと比べて珍しいお宝があるというわけではないのだ。

民俗の主役は、歴史上の有名人物とは異なり無名の庶民である。文書や記録に残らない普通の人々であっても、ひとつの展示ができるほどの豊かな世界があるのである。それはおそらくあなた方の近くにいるおじいさんやおばあさんでも同じことである。そのことを知って頂ければ幸いである。

◆山とともにある暮らし

春子さんの話を聞いて思うことは、やはり山村の生活における「山」の比重の大きさである。

現代社会では、何を手に入れるにもお金を出してお店で買って来る。しかし、山のムラでは、道具も資材も燃料

も食料も生活に必要なありとあらゆるもののかなりの部分を（店や行商人から求める物もあったが）山から入手していた。もちろん、それは店で物を買うように完成された品物やパッケージに包まれた食べ物ではない。山の生んだ物を資材にし、食料にするには、山からそれらを運んで来ることをはじめさまざまな技術と知恵や大変な労働が必要であった。

今回の展示ではその技術と知恵の一端を、いくつかのテーマに分けて紹介する予定である。

◆リサイクルの知恵

それほど苦労して手に入れた物だから、無駄に使うことは考えられなかった。宗石家の納屋をのぞくと、解体した家の敷居や障子戸、角材、板などが多数、いたる所に眠っていて驚かされる。すぐに何に使うかというわけではないが、何か必要が生じたときに備えてとってあるのである。

茶つみから戻る宗石春子さん
後ろは、資料調査員の朝倉さん

リサイクルを考える上では牛の果たした役割は見逃せない。

春子さんは、米のとぎ汁や鍋を洗ったニゴリ、芋をむいた皮にいたるまで捨てずに牛にやれと言われた。牛にやる草は、やわらかい上のものは餌にやり、固くなったのは牛舎の敷草にした。牛舎で牛の糞のついた敷草は次には肥料として野菜など作る畑に打ち込んでいったのだ。

その無駄の無さ、徹底的な利用には驚かされる。ベストセラーの本になぞらえて言えば「捨てない技術」とでも言おうか。モノが少なかった時代で、大家屋だからできることだが、無駄や過剰が満ちあふれながら地球資源を食いつぶそうとしている現代社会の我々は、もっとかつての山村の知恵に学ばなくてはならないのではないだろうか。

灯の道具を並べてお話をする春子さん

◆協力しあう人々

かといって、単純に昔の山村が良かったとは言えないだろう。離れた所にあるわき水から水を桶に汲んで担って来る。行くまでにお昼が来てしまう遠い山の仕事場。落ち葉がすぐにつまり水が流れなくなる竹の樋の水道。今の便利で楽な生活からは想像できないようなきびしく不便な暮らしだった。春子さんも本当に今は楽になった、と語る。

きびしい生活だったからこそ、人々は力を合わせて仕事に当たった。

機械や車や道路の無い時代には、労働や運搬は全て人力に頼っていた。子供でも学校が終わると何か運びに山へ行ったし、どんな年寄りでも、家の周りの草ひきなどそれに応じた仕事があった。それぞれに応じた役回りがあった。椿（つばき）やミツマタを蒸（む）すときや田植えなど集中的に労働力が必要なときには、イイ（結い）と言って気の合った隣近所がお互いに手伝いあうという習慣があった。

春子さんの言葉で印象に残るのは「言わんずつのイイ」という言葉である。イイのようにあらかじめ約束するのではなく、誰かが困っているとき、人手の要（い）りそうなときは、見つけたら自分から手伝いに行ったものだという。それを「言わないで行なうイイ」と言ったのである。良い言葉だと思った。次に自分の所が大変なときには手伝ってくれる、と期待してやるのでもないんよ、と春子さんはつけ加えた。

そのイイも、機械が仕事をするようになって必要なくなった。過疎のせいもあるが、人が顔を合わせる機会は岡ノ内のような山のムラでも減ってしまったのだそうだ。

労働が楽になったのは喜ぶべきことだが、「言わんずつのイイ」の世界も消えようとしているのは何となく淋しい気持ちがする。

春子さんが生まれた大正九（一九二〇）年から現在までの八〇年の間に、山の村は急速にその姿を変えてしまった。その良かった所と悪かった所を考えて二十一世紀を迎えることは私たちの責務だろう。そのためには、まずひとりのおばあちゃんの語りに耳を傾けることから始めよう、と私は考えるのである。

物部村岡ノ内を訪ねて

企画展「おばあちゃんの見た山村の80年」の調査から

朝倉　千代

高知県物部村岡ノ内は、高知市より車で一時間あまり、高知空港近くから太平洋に注ぐ物部川の上流、槇山川沿いに位置する静かな山間の集落である。山里ではあるが、二車線道路の国道一九五号線が抜け、車はすいすいと行き交う。その岡ノ内へ、企画展『おばあちゃんの見た山村の八〇年』の語り手である宗石春子さんに会うため、およそ二年前から通っている。

わたしは、高度経済成長期も終わる昭和五〇年に生まれ、他所から運び込んだ土の上に、大量生産の資材で組み立てられた家々の集まる住宅地に育った。そんなわたしにとって、土佐の山村の風景には年月をかけて積み重ねられた深い調和が感じられ、そこでの暮らしとそこにある人生に関心を覚えていった。

折しも、県立歴史民俗資料館には、宗石家から寄贈された民具の数々があるということを聞き、民具台帳を見せてもらった。そして、昨年度より資料調査員として、かつての仕事や食事、生活空間について、春子さんの話を聞くことになった。

ある日の春子さんの手

春子さんの八〇年にわたる歳月の中で、「毎年順繰り」の仕事が繰り返されつつも、科学技術の進展と共に産業構造が変化し、それにともない山村での仕事の内容も、働く場所も大きく変わっていった。仕事はより現金収入になるように、場所は山中の仕事から標高をさげる方向へと。

春子さんが関わった仕事の大きなものを並べてみても、二〇歳で結婚する前に二年間淡路の紡績工場で働き、結婚してからは焼き畑、稲作、畑作、カジ蒸し、植林（造林）、養蚕、ユズ栽培、土木の仕事など。さらに、家の周りでの仕事は、水汲み、炊事、家畜（主に牛）の世話やら、道や屋根の普請など、休む間もなく仕事が続く。「なんでも体じゃった。」「昔のものは体ばあ使った。」という仕事であり、その仕事に応じた道具が必要になる。道具の種類によっては、人人の体や作業場所に合わせた物も作られ、家族の人数も多かった時には、一軒の家に膨大な数の道具が所有されていたのである。

日々の糧である食べ物についても、ほぼ自給自足がなされており、種を蒔き苗を植え、手間をかけ収穫して、遠方の山畑であってもそれを運ぶのは人力によっていた。さらに、長い貯蔵に耐えるよう、イモであればシビ（凍み）ないように保存環境を確保したり、カライモや大根であれば切って日干し用に加工する。豆や雑穀の類も、その用途に応じ手を加える。その過程においても、いくつもの道具が使い分けられるのである。そして、その道具の材料もまた、強度や仕事に対する抵抗力の違いで選ばれることになる。

必要とされることで生まれてきた道具たちが、生産の変化にともない、現在では出番を失った。それにより、労働の中で受け継がれてきた道具の使い方が跡絶えるというだけでなく、道具を向ける対象―土や水、木々や作物―に対する関わり方の知恵も消えるのではないだろうか。自然を押さえ込むのではなく、自然と共にあった仕事の進め方も。

屋敷地に点在する納屋の一風景

宗石家の納屋には、役割を終えたというよりは、必要なときにはいつでも動き出せるかのように、いろいろな道具が残されている。

わたしは、山の仕事も畑の作業も知らず、植物の特性さえ知らないままである。さらに、水も電気もガスもないということさえ、ようよう想像する程度の認識では、何を聞いても何を見ても初めてのことばかりである。「おばあさんのごだばなしを、それほどまでに書いていって何になる。」といつも春子さんに笑われるが、明らかに断絶した暮らしのことを、何でも聞いておきたいと思い続けている。

（当館資料調査員）

土佐の民具　3
漁船に積み込む民具

坂本　正夫

今回は明治・大正時代から昭和二十年代頃までの漁船に積み込まれていた民具を紹介してみよう。

水樽

出漁中の飲料水を入れる樽でミンタル（水樽）、ミズタル（水樽）、ハズなどと呼ばれていた。

水を入れて蓋をし船中の邪魔にならぬ場所に置き、柄杓（ひしゃく）で汲み出して飲んでいたが、冬は凍り夏は太陽熱で沸き熱くなるが、咽喉（のど）が乾くのでそんな水でも飲んでいた。

一艘の漁船にひとつの水樽を積み込んでいたが、その太さは船によって異なる。小さな漁船は樽だったが、大きな漁船には水タンクと呼ぶ大きな箱を使用することもあったが、樽は桶屋、タンクは大工が作っていた。なおカツオ船のように大勢の漁夫が乗り込む船では、カシキが水樽を管理していた。

写真（1）（2）は中土佐町久礼（中土佐町教育委員会蔵）のもので高さ二六センチ、上部の径三二・五センチである。

ハンダイ

出漁中の弁当を入れる飯鉢。これに飯を入れて漁に出るが、おかずは沖で釣った魚を味噌汁にして食べていた。桶屋に頼んで製作するが太さはいろいろあり、大きなものには一升飯（約一・四キログラムの米を炊いた飯）ぐらい入る。蓋があるので雨が降っても濡れないし、上に腰をかけることもできる。

ハンダイは個人商売（個人単位の漁）で日帰りとか、泊まることがあっても一晩ぐらいのときに使用していたが、多くの漁夫が乗り込むカツオ船などでは使用しない。

写真（3）は中土佐町久礼で採集のもので、中土佐町教育委員会蔵。

沖箱

船に積み込む道具箱。製作は指物（さしもの）大工に頼んでいたが、太さはいろいろあるけれどもヨコが八寸（約二四センチ）、タテと高さが各六寸（約一八センチ）位のものが普通であった。蓋を開けると内部はいくつかに分かれ、引出しがついており釣針などは種類別に入れられていた。カツオ船などのように多人数の漁夫が乗り込む場合には、各漁夫が一つずつ沖箱を持参していた。

沖では潮の流れや水温、風の具合などによって釣れる魚種が異なる。だから、海の状態によって釣れる魚の種類を即座に判断し、それに合った漁具を用いるのが一人前の漁師である。そのため船の中にはどのような魚がきても、またどんな漁にでも即応できるように各種の釣り針、ビシ（おもり）、釣り糸、そのほかいろいろな漁具を積み込んでいた。

写真（4）は一九六八年に須崎市久通（くつう）で見た沖箱（左・右）

土佐における浄土真宗の展開Ⅰ
救済への路　中世の旅人　親鸞上人

泉　誠司

古代末期には内乱、天変地異などの社会不安を背景に、末法思想の風潮とともに時代の要請に応じ仏教界の革新が行われ、新仏教の勃興をみるに至った。殊に、鎌倉新仏教は教義を平易に説き、一般庶民が容易に実践できる信仰形態をとっていた。

土佐の国においても、その潮流は現世利益を求める民衆の仏教へと転化し始めた。そして、四国巡礼八十八ヶ所へとつながり、寺院の建立へとつながっていった。

中世土佐の仏教史は、廣江清氏の研究（『中世末土佐の宗教』史談選書8 昭和五八年）により解明が進められていった。宗派が記載されていない『長宗我部地検帳』の寺院に『南路志』より土佐に顕在した各宗派の寺数を明確にしていった。廣江氏の研究によると『長宗我部地検帳』に浄土真宗（一向宗）の寺院が全く見えない。その理由として

①宗派不明の中に浄土真宗の寺院が多かった。

②武士階級の帰依者が少なく、寺領が宛てられなかった。

③この地方（土佐国）の布教が遅れ、寺院として独立するまでにいたっていない。

以上三点をあげ、③が主な理由としている。周知のとおり、一向一揆が文明期以降、各地に起こっている。為政者にとっては非常に厄介な存在であり、浄土真宗（一向宗）による農民の団結を恐れていた。すると、浄土真宗の伝播は近世まで待たなくてはならなかったのか。『土佐國蠹簡集』に記述されている弘治三（一五五七）年二月二九日付けの一条康政が渡辺主税介に与えた文書に「一向衆之事其身一人之義可有御免者也」とあり、出家は許されても布教は許可がおりなかったことが見えており、浄土真宗が土佐国にも伝播されていたことが伺われる。

領主がそこまで警戒した浄土真宗（一向宗）とはどのような宗教なのか少し紹介したい。開祖親鸞（一一七三～一二六二年）は「善人なをもて往生とぐ、いはんや悪人をや」（『歎異抄』）の一説で有名な悪人正機説を説き、また公然と肉食妻帯という戒律を犯し俗人性を徹底化した僧侶の一人である。

親鸞の研究は東西本願寺を中心に教義から綿密な研究が行われてきた。しかし、社会思想史上の研究が積極的に行われるようになったのは戦後からである。なかでも、服部之総氏の『親鸞ノート』（昭和二三年　福村書店）、家永三郎氏の『中世仏教思想史研究』（昭和二二年　法蔵館）は、その後の親鸞研究に多大な影響を及ぼしたと考えられる。社会思想史上の論点は親鸞の社会的基盤をどの階層に求めるのか。真摯な論争が繰り広げられた。

親鸞は承元元（一二〇七）年の専修念仏停止により越後国に流され、建暦元（一二一一）年に流罪赦免になっているが、京都へは戻らず嘉禎元（一二三五）年まで関東に留まり布教活動を行ったと思われる。その関東での布教の対象を服部之総氏は百姓層・商人層に求めている。親鸞が関東の門徒に宛てた書簡のなかに

「この世のならひにて念仏をさまたげん人は、そのところの領家・地頭・名主のやうあることにてこそさふらはめ」『親鸞上人御消息集』（『親鸞上人全集第三巻書簡篇』）

「領家・地頭・名主のひがごとすればとて、百姓をまどわすことはさふらはぬぞかし」（『同書』）

と記されており念仏を妨げる者は武士階層であり、念仏の帰依者は百姓層であると結んでいる。

家永三郎氏は親鸞の宗教が民衆の宗教であることは、常識的に云われてきたところであり、「朝家の御ため国民のために」という消息文を護国思想根底からの否定と前置きをし、仏教の立場からみて武士階級こそ最も罪深き生活を送る衆生であると位置づけ

「武蔵よりて、しむしの入道どのともうす人と、正念房ともうす人の王番にのぼらせたまいて」

の消息文に登場する人物は大番役に上洛する武士階級である。必ずしも真宗門徒と武士階級は対立関係にあったのではない。しかも、宗教上の問題でわざわざ東国から京都に出かけるだけの経済的余裕が百姓層にあっただろうか。親鸞の宗教がいずれの階級の生活体験を媒介に形成されたか、単に百姓層と結びつけるのには問題があると指摘している。

以上、親鸞の宗教を社会思想史（歴史学）から解き明かそうとした原点といってもよい。土佐の親鸞＝浄土真宗の研究はどうであろうか。中世末期、石山本願寺を中心に布教活動と南海交易路を結びつけた秋澤繁先生の立証は浄土真宗の伝播を知る貴重な研究である。

カルチャーサポーターがはじまります。

歴民館の活動を応援してくださるカルチャーサポーターの研修が、いよいよ今年八月からはじまりました。カルチャーサポーターの制度は、財団法人高知県文化財団の四施設、美術館・龍馬記念館・文学館・歴民館で同時スタートします。

Bコースの歴民館には三十七名の方が応募されました。左の全日程を終了後、認定証が交付され、本格始動は来年度からということになっています。

カルチャーサポーター、それは文化施設の新たな「可能性」です。カルチャーサポーターに参加する皆さんに、来館者と歴民館をつなぐ役割をになっていただくことを期待しています。そして、カルチャーサポーターさんたちご自身にも、ともに学び、ともに考える広場として、歴民館を活用していただくことを願っています。

さて、当館のカルチャーサポーターは、生活伝承をひとつの柱としようと考えています。今年は、「こんにゃくづくり」と「ワラ細工」という二つの子ども歴史教室をお手伝いいただきます。

民家の火焚きは、いろりばた談義。ものづくりの楽しさや生きていくために大切な知恵をこどもたちに伝えるためにはどのような活動を展開していけばいいのか、一緒に考えていきましょう。

昔の暮らしを調査して体験学習に活かしたり、田植え体験を企画するなど、夢は広がっていきます。

カルチャーサポーターさんたちと一緒に行なうさまざまな活動を通して、歴民館を「親しまれる博物館」に成長させていきたいと考えています。

カルチャーサポーター（Bコース）研修とモデル事業の日程

基礎研修　（A～D全コース・於美術館）

平成12年

8／26　文化施設の成り立ち他

実務研修　（於歴民館）

平成12年

9／16　館の概要・接客

9／30　考古・歴史の各概説

10／21　民俗の概説【民俗講座１】

11／11　民家の概説

モデル事業（於歴民館）

平成12年

11／11　民家の火焚き

11／25　こんにゃくづくり【子ども歴史教室】

12／9　ワラ細工【子ども歴史教室】

12／23　障子の張り替え

平成13年

2／24　民家の火焚き

3／10　民家の火焚き

炮術展の資料から

—岡豊城跡出土の鉄砲部品—

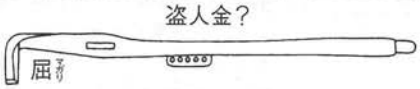
「我が家中には吊した針に玉を当てるほどの鉄砲の名手がたくさんいる。家老の久武内蔵助なども皆、鉄砲上手である…。」これは、長宗我部元親が他国の武将に豪語したというエピソードです。

当館には、岡豊城跡四ノ段より出土した鉄砲の部品が収蔵されています。

これまでは火縄を付ける火挟と考えられていましたが、専門家の鑑定により、南蛮筒の盗人金ではないかとの御教示をいただきました。国産銃でないとすると、元親はいったいどこからこの銃を入手したのでしょう？

薩摩？豊後？それとも堺でしょうか。いずれにしても南海路と元親を考えるうえで重要な資料といえるかもしれません。

盗人金？



所 荘吉著『図解古銃事典』より

子ども歴史教室「水てっぽうをつくろう」平成12年8月12日実施。
カルチャーサポーターさんと一緒にこうしたものづくりを行います。

平成12年10～12月の催し物

企画展「おばあちゃんの見た山村の80年」
10/13(金)～2001年2/18(日)

水道も、電化製品も、自動車も無かったつい80年ほど前の山里。まだ人間が自然とつながりながら生活していた時代におばあちゃんは生まれ育ちました。そして80年の歳月が流れ、山里にはいろいろな変化がありました。

歴民館に多くの資料を寄贈していただいた物部村岡ノ内の宗石(むねいし)家の資料を中心に展示し、おばあちゃん春子さんの視点から、山村の生活とその変化を振り返ります。

民俗講座

10/21(土)14時～16時　①土佐民俗学入門
講師 坂本正夫　※はがきで申込み先着100名。
【予告】②民具と方言（2001.1/13）
③岡ノ内の民具（2001.1/27）

子ども歴史教室　14時スタート

11/25(土)こんにゃく作り
12/ 9(土)ワラ細工
12/23(土)土佐民話の家⑤正月の話 2
※電話で申し込み、先着各30名。

史跡めぐり

10/28(土)「発掘された日本列島2000
－新発見考古速報展を見る－」
香川県歴史博物館 申込み締め切り10/6
11/18(土)「香我美町山北の棒踊り」
申込み締め切り10/27
※専用の申込書をご請求ください、
申込み多数の場合抽選。

出版物のご案内

企画展図録「近世土佐の炮術史」
一二〇〇円（送料三一〇円）

新解説員の紹介

ムクゲの花の咲き始めだしたこの七月から勤めさせていただくことになりました。筒井美貴子です。展示室内には、高知県の歴史資料が豊富に展示されており、初めて目にする展示や資料に驚きました。私たちはご来館された皆様にも少しでも歴史に触れて頂き、架け橋になればと考えております。

れきみんサークルからのお知らせ

ただ今入会料金半額
十月～三月に入会申込みされますと、入会金は半額の六〇〇円です。
お問い合わせは歴民サークル係まで
（歴民ホームページもご覧ください）

〔歴民館日録〕

月 日	出 来 事
7・20(木・祝)	企画展「近世土佐の炮術史」開幕
22(土)	宇田川武久氏講演会
29(土)	「鉄砲足軽になってみよう」
8・3(木)～9(水)	博物館実習
・5(土)	講座「土佐の炮術史」
・12(土)	「水てっぽうをつくろう」
・19(土)	梶輝行氏講演会
23(土)～25(土)	高知東高等学校職場体験
・26(土)	カルチャーサポーター基礎研修（於美術館）
	高知市立城北中・一宮中学校職場体験
9・3(日)	企画展閉幕
・16(土)	カルチャーサポーター実務研修
・30(土)	カルチャーサポーター実務研修

《ひとこと》

「炮術展」期間中、80kgもある大筒「谷神」を見て、「こんなん撃てる訳ないやんか…」との声がお客様から聞こえてきました。

本当に撃ってたんですよ――！（野本）

子ども歴史教室「水てっぽうをつくろう」。子どもより夢中になって作るお父さん方の姿もみられました。（中村）

早いもので歴民館は来年五月に開館十周年を迎えます。目下、記念イベントを企画中です。（曽我）

岡豊風日（おこうふうじつ）第37号
平成十二年十月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044 南国市岡豊町八幡1099－1
TEL 088（862）2211
FAX 088（862）2110
開館時間　午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は翌日）12月28日～1月4日、臨時休館あり。
入館料　通常期[常設展]大人(18歳以上)450円
団体(20人以上)360円
高校生以下は無料
療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳所持者とその介護者（1名）、高知市及び高知県長寿手帳所持者は無料
印刷・共和印刷㈱
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/rekimin/